神様代行はじめました。

相原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様代行はじめました。

【Ｎコード】
Ｎ７０２８Ｙ

【作者名】
相原

【あらすじ】
神様とマイペースな男のお話。

※亀更新注意

第零話（前書き）

カッとなってやった。後悔はしている。でも反省はしてない。
完全ノー計画です（^__^;）

第零話

某日、死にました。

原因は至って簡単。病死。

居眠り運転に巻き込まれて、とかそういう偶発的な出来事の末ではなく生まれてからずーっと抱えてきた病によって割と安らかに息を引き取った。

まー十歳まで生きれたら奇跡だと医者に言われてなお二十歳まで生きて見せたのだからよく頑張ったものだと思う。よく頑張った自分。今まで何度も何度も死にかけて、いっぱいいっぱい苦しかったけどそれもこれでお終いだ。

ようやく俺は解放された。

別に自分の人生に不満があったわけでもないし、不幸だと思ったこともないけどそれでも世界が暗転した瞬間に訪れたのはまぎれもない、安堵だった。

これでもう苦しい思いも痛い目にもあわなくていいんだって、思った。

でも思い返せば俺は十分すぎるほどしあわせだった。満ち足りた一生だった。

ぐるぐると脳内を駆け巡るこれまでの思い出。

うん。俺ってしあわせじゃん。

忙しいだろうに見舞いに来てくれた友人達。

入退院を繰り返していたせいかかなり仲良くなった病院関係者さんたち。

そしてなにより、ちょっとおっかないけど一番に俺を想ってくれた彼女。

俺はしあわせだったよ。確かにちょっと苦しいこともあったけど、挫けそうになったこともあったけど、お前がいてくれたからしあわせだったよ。
だからさ、泣かないでよ。お前さ、笑えばかわいいんだから、きっとすぐに俺よりいい男が現れるから俺のことなんか早く忘れて絶対絶対しあわせになってよ。

あぁ、お願いです神様。なんでもする。なんだってするから、どうか彼女を。
弱いくせに強がる彼女をどうか、すくって、みたして、しあわせにしてあげてください。

俺はもう彼女に何もしてあげられないけどあなたなら出来るでしょう？
お願いお願い。その代わりに俺はあなたのためになんだってするから。

かみさま。

第零話（後書き）

基本読み専なんですがいろんな方々の小説を読んで自分も書きたくなってしまいました。
更新はかなり遅いと思いますがお付き合いください。

第逢話

ぱちりと、なにがなんだかわからなくて一つ瞬きをした。

「…」

真っ白な世界にぽつりと、襖がある。何故だ。
あ、そうか夢か。
納得。ん？でも人って死んでも夢を見るものなのだろうか。あれって確かその日一日の記憶を整理するために見るものだったような…。
分からない。
分からないから取りあえず目の前にある襖を引いてみた。

ススーと詰まることなく襖は開いた。

「よう、こんにちは」

挨拶された。

「はぁ。こんにちは」

取りあえず返しておいた。
すると挨拶してきた栗毛の女の子は驚いたように目を見開かせてぱちぱちと瞬き。

「驚いたなぁ。おにーさんよ。お前さん驚かないのかい？」

「いや、驚いてはいるけども」

正直言ってよく分からないのが本音だ。栗毛の彼女はよく見れば手に湯呑を持っていた。もう片方の手には緑茶のお供、せんべいがある。
どこのお茶の間だよ。

「ふん。まあいい。ギャーつく騒がれるよりは面倒がないからな」

にやりといかにも悪そうな笑みを浮かべる栗毛の彼女。せんべいバリバリしながら言われるとちょっと滑稽だ。

「儂は地球ではない世界を管理している管理者なのだつまり神様だな。そんな神様の儂から提案だ。お前さんの願いを叶えてやるから、儂のお願い聞いてくれんか」

「いいけど」

「うむ。分かってるぞ。ちゃんと説明しろというのだろう。けどそれは出来んでな大人しく従ってもらうぞ……は？おいおにーさんよ、今なんつった」

「いいけど」

さっきも言ったことを繰り返す。
自称神様は湯呑を畳の上に落とした。
驚きすぎて声も出ないのかまるで鯉のように口をぱくぱくさせる。

「ば、馬鹿じゃないのかおにーさん！神様だぞ！神様からのお願いだぞ、もっとリアクションを！驚きを！てゆーかさっきからリアクション薄すぎるんだよおにーさん！」

罵倒された。何故だ。

第契話

ガーガーと喚く自称神様。
どんどん内容が離れて行っている気がするのは…まぁ勘違いではないのだろうな。

「あーもう！わけがわからん。死に際まで他人のこと思ってるからどんなお人よしかと思ったらこんなリアクションの薄い奴だとはがっかりだよ！儂の期待を返せよ！神様だぞ神様！滅多に会える存在じゃないんだぞ！もっとこう！感動とか？あるだろ一杯！」

あらん限りの怒声が耳から脳に運ばれて頭痛が襲ってくる。
あーキンキンする。なに？お願い聞いてほしいていったから『いいよ』って返事しただけなのになんで怒られてるんだろう俺。理不尽。

「や、あの神様さん？表情に出なかっただけでほんとはすっごい驚いてたんだよ実は。今も感動してる。感謝感激雨霰。ちょーかんどう！」

「え？ほんとに？」

え、信じるんだ。えぇー信じちゃうんだ。簡単な子だなぁ。

「うんほんとほんと」

「そ、そうだろうそうだろう！なんたって儂は神様だからな！」

勿論口から出まかせなわけだけどなんかめんどくさいんでいいや。
自称神様はごほんと咳払いを一つするとにやりと笑う。
いや、今更取り繕っても無駄だよ。

「取り乱して悪かったなぁおにーさん。儂のお願いの詳しい話は出来ないがほんとにやってくれるんだな？」

「うん。いいよ。だってあんたも俺のお願い叶えてくれるんだろ？あの時なんでもするって言ったし、俺の願いがかなうなら、まぁ仕方ないわな」

そもそも俺はあの時死んだはずで、なんかよく分からないけど自称神様にここに魂だけ連れてこられた身分だ。（っとさっき喚いていた）断る理由はないと、思う。

我思う。故に我あり。

俺は今魂だけの存在らしいけど、自我があるならそれは生きていると言っていい気がするんだよなー。
根性ふり絞って二十余年も生きたけど、やっぱできるならもっと生きたいしな。

ふーん。と自称神様が鼻を鳴らす。

「お前さんが何を想って何を考えているのかは儂にはとんと分からんが、この状況は儂にとって好都合というわけだ。くくく。お前の彼女とやらは儂が必ずや幸せにしてやろう」

「ありがとう」

「なあに。持ちつ持たれつ、だ。お前さんも、儂の願いをちゃんと叶えてくれよ」

バリ、と音を立てながらせんべいを咀嚼する自称神様。浮かぶ表情は、楽しげなものだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7028y/

神様代行はじめました。

2011年11月21日10時54分発行